

KSTNET WEB版 2004年2月号

1.熊本失語症研究会報告

熊本機能病院 永友真紀

1月31日（土）午後3時から、熊本機能病院研修室にて失語症研究会が行われました。県内各地より27名の先生方が参加されました。今回は青磁野リハビリテーション病院の野田和宏先生と山鹿温泉リハビリテーション病院の斉藤佑美先生に症例を呈示して頂き検討会を行いました。

野田先生は、「失行・失認を合併した失語症の一例－評価・訓練を行って－」と題して、失語症に加え視覚失認、観念失行、観念運動失行、構成障害、視覚失調を示した症例を報告されました。SLTA（標準失語症検査）やVPTA（標準高次視知覚検査）などの詳細な検査結果から障害メカニズムについて考察されました。また、評価に時間を費やしすぎて患者さんに負担になったことを反省点としてあげられました。ディスカッションでは、視覚失認の定義や症状の把握が困難な症例の評価の進め方について意見が出されました。

斉藤先生は、「運動性失語症を呈した1症例～代替補助手段の検討を行っている症例～」と題して、表出面に重度の障害がある患者さんにコミュニケーションボードを導入した経過を報告されました。段階的な訓練を実施したにもかかわらず日常への般化が困難だった要因として、コミュニケーション相手・環境に関してのアプローチが不十分だったことをあげられました。ディスカッションでは、他のAACの例として、ホワイトボードやクリアファイル、会話ノートの活用について意見が出されました。

今回初めて2症例について検討を行いました。それぞれ異なった内容で大変興味深かったのですが、ディスカッションの時間が短くなったことが少し残念でした。

症例を先生方の前で発表し意見を頂くという作業はストレスを伴いますが、症状の捉え方や訓練内容が独りよがりにならないためには必要な作業だと思います。私もそのような機会を可能な限り持ち続けたいと思いました。

2.タイプA行動パターン検査の言語臨床での応用

○熊本機能病院 小藺真知子

山鹿温泉リハビリテーション病院 横山典子熊本

県ひばり園 池田万里子

【発表要旨】

タイプA行動パターン検査は、虚血性心疾患の危険因子であるストレスをチェックするために考案された検査である。タイプA行動パターン的人は「競争心が強い、せっかち、仕事への深い関与」という傾向があるため、高血圧、高脂血症などを誘発し、虚血性心疾患を発症しやすいといわれている。失語症者にも虚血性心疾患患者が少なからずあり、再発予防をも含めた指導が必要である。この検査は患者の行動パターンを把握することと、ST自身のストレスの自己

管理を行うためにも有用であると思われる。2003年8月の熊本県言語聴覚士会会員に実施したタイプA行動パターン調査63人の平均は、53.3/100点（最高71点、最低40点）で平均的な数値であった。得点60点以上は、タイプA行動パターン傾向があると見られるが、数名のタイプA得点の高い人にはフィードバックを行い、リラクセーションに心がけるよう指導した。被験者からは、検査によって自分のタイプA得点が高いことを気づかされ、自己コントロールの必要性を知ってよかったという感想を得た。

タイプA傾向の人は、行動をコントロールする上で自分を客観視することが重要であるといわれている。さらに、相手の行動パターンを知ること、自分と相手の違いを考慮したよい人間関係が成り立つと思われる。この検査は、患者、家族、スタッフ、実習生などの行動傾向を理解し、臨床や実習指導などに有用であると思われる。

3.各ブロック活動報告

[東部]

[西部]

[中部]

[南部]

～南部ブロック第1回勉強会の報告～

2月21日土曜日、南部ブロックの第1回目の勉強会が開かれました。

南部ブロックでは、3ヶ月に1回、施設見学も兼ねて担当施設で勉強会を行うということになり、第1回勉強会は芦北学園発達医療センターで開催されました。今回は、前半に施設見学、後半に勉強会という流れでした。

施設見学では、徳永先生に案内して頂き、個別訓練室、聴力検査室、PT・OT訓練室など、実際に日々臨床をされている部屋を見学させて頂きました。他施設の訓練室を見学できる機会はあまりないため大変興味深く、また、同じ小児の施設としてお子さんの特徴に配慮した環境作りなどが勉強になりました。

後半の勉強会は、「摂食クリニック」について柴田先生から紹介がありました。クリニックでは、依頼のあった利用者の方に関してメンバーでのミーティングや摂食に関する勉強会を行った上で、食事状況のチェックや改善、VFでの検討を実施されるということでした。

メンバーに医師やPT、OT、STなどの専門職だけでなく、病棟の各職種から1名ずつで構成される摂食係や、個人担当も含まれているという点が印象的でした。普段一緒に食事をされる方が指示通りに食事に関わるだけでなく、御本人の全身状態や摂食時の姿勢、口腔機能の状態を知り、メンバー全員が共通理解の上で進めていくという点に、クリニックの意義があるように感じました。また、VFや食事状況チェックの結果を、担当を通して口頭だけでなく視覚的に分かりやすいようケアカードを作成して伝達することで、他のスタッフへの伝達も進みやすく、御本人もより多くの相手と食事をすることができることにつながっていくのではないかと思います。

今回の勉強会を通して、専門職だけでなく普段関わる方もお互いに摂食に関する意識を高めることの重要性を感じました。また、専門職としていかに御本人や介助者の日常の食事面で

の負担をなくし、安心して楽しく食事ができるかを考えることが求められるということを実感しました。

[北部]

「県土会北部ブロック懇親会」報告

聖ヶ塔病院 リハビリテーションセンター 脇山鏡太郎

1月31日土曜日、熊本市内の季楽亭で北部ブロック懇親会が開催されました。出席者は13名で、お寿司や鍋料理を囲んでにぎやかな会となりました。私は、他病院の先生方♦が行っていらっしゃる訓練の内容や、院内でのV F検査のシステム作りなどのお話をたくさん伺うことができ、多くのアドバイスをいただくことができました。私の勤務する病院は経験年数の浅いS Tばかりなので、大変参考となりました。また自己紹介では先生方の意外な趣味について知ることができました。人間性豊かなりハビリテーションを実践していくために、私生活の充実も必要であると感じました。今後のブロック会の予定については、他ブロック同様の病院見学会を、3ヶ月ごとに持ち回りで行うことに決定しました。情報交換の場として、ブロック会は大変意義のあるものと感じました。